……美しいが、右翼の理想は（少くとも現在のそれは）……、……インテレストの下に眞理を從屬せしめ、宿命的な不正義……であると聲明することによつて、正義の所在を明にしてゐる。たゞ、彼が直接左翼人の政治行動に贊同することの不可能な所以は、彼らのポリチツクが右翼の場合と同じやうに屢々醜惡なものとして現れるからであると云ひ、左翼の Mystique を左翼の Politique から區劃する。

かうした對政治的態度は特にバンダ一人の場合に著しいものであるが、しかしそれはこの聯盟に參加したインテリゲンチヤの大多數がもつ精神狀態に多分に共通したものであると云ふことが出來る。換言すれば、彼らはイデオロギイの上で、ある者はコムニスト或はソウシヤリストであり、ある者は急進社會黨（ラディカル）であるが、政治的實踐の上では容易に同意し得ない立場に置かれてゐるのである。この立場は、同聯盟のジイド、フエルナンデス、ロマン・ロオラン、ブロツク、ブルトン、ゲエエノ、（國際文化雜誌「歐洲」主筆）、マルク・ペナール（昨年度アンテルラリエ賞をうけたプロ作家）、レオン・ヴエルト（元「モンド」主筆）……等が佛蘭西×××に對してとつてゐる獨立の態度を說明するものであり、またもと〳〵ラディカリストであるアランが現在の急進社會黨（ラディカル）政策から自らを分離させてゐる理由である。フエルナンデスの公開狀や、本年二月號

「文藝」に掲載されたジイドの「一つの宣言」を讀めば、誰しも左翼諸政黨に對して彼らが置かれてゐる特殊なそしてデリケエトな立場の生れる必然性が理解されるであらう。ことに筆者のやうに長年フランスの社會生活を經驗し、ある期間はその政治生活の雰圍氣に生き、また屢々……のとつた公式的な智識階級要素排斥のタクチツクなりポリチツクを眼前にしてきた者にとつては、現在彼らの保持してゐる獨立の態度は寧ろ切實な現實的必要として受理されこそすれ、少しも中間的・日和見主義の姿態として解釋されないのである。フエルナンデスはその公開狀のうちで、

「……今日社會黨が徹底的に軟弱であり、自由主義的弛緩に支配されてゐることは瞭な事實であるが、一方共產黨はどうであるか。忌憚なく云へば、指令と暗號に充たされた共產黨は私をして自衞の態度をとることを餘儀なくさせるやうなドグマチズムを私につきつける」

と云つてゐるが、すぐ次のやうな言葉を加へてゐる。

「後日のために自由を保持することと、無關心であることは全く別物である。私がいまこゝで貴方に打明けた愼慮の孰れにしても、……私がプロレタリアの行動に身を擲つて參加することを拒絕しないだらう。その日にあたつて、躊躇することは……ことに外ならないからである。吾々は今から……の行動に忠實であ

ることを誓はねばならない。（縱令それが論駁すべき餘地のある戰術をとるにしても）。而して吾々は、それまでに殘された餘裕を利用してプロレタリア運動により正鵠にして　効果的な方向を與へることに努めなければならない。私をして云はしむればこの態度こそ、勞働階級の主張に參與する智識階級者のとるべき態度であらう。勿論斯くの如き立場は、智識階級者が彼ら自身の反省を最後まで繼續することを妨げることにはならない。彼らにはそれだけの權利があるのだから」と。

フエルナンデスの言葉を少し長く引用したが、それは佛蘭西智識階級聯盟とその「反フアツシヨ・監視委員會」の社會的機能の性質を明白にする意味に於ても、またその運動から多分の刺戟と暗示をうけて發生した吾が國の能動主義活動の存在理由及びその將來的方向を考察する意味からしても、一應重要であると信ずるからである。それにもう一言、この機會に云つて置きたいことは、さきほどバンダの言をひいて述べたやうに、この聯盟はフエルナンデスの唱へる行動的ヒユマニズム（卽ち行動主義）に依據する文學運動でも政治動運でもなく、寧ろ思想の多樣性を肯定した廣汎な意義に於けるヒユウマニズムの非政治的行動（バンダの場合は反政治的であるが）であることだ。勿論私は斯く云ふことによつて、フエルナンデスが個人として團體に對して持つ潛勢力を無視するものでないが、兎も角、運動自體が原則的にモツトーとするところは、各個人

の社會的良心をマニフエストすることであり、と同時に各個人による自由・眞摯な社會情勢の檢察（アンヴスチガシヨン）（バンダはこの精神的態度を科學的と呼んでゐる）である。私は斯うした佛インテリゲンチヤの非政治的な、しかも積極的にプロレタリアのために貢獻し抗爭しやうとする、而して集團にあつて各自の個性意識の自由を認める協力（アクヨシン）行動（コンミユーヌ）をば、智識階級的サンデカリズムの現れとして考へたいのである。（若し斯うした名稱が妥當であるならば……。）人或はかゝる約束の下にある集團行動が對社會的にもつ直接勢力なり効果を疑問するかも知れない。疑問されるまでもなく、私とてもそれらの問題に對して決して樂天的でないし、また精神的影響力が一般社會に對しても、或はもつと狹く云つてインテリゲンチヤ一般に對してすらも、ある一定の限界の上に立つてゐることを認知する者であるが（こゝで必然的に Actions politique; économique の必要（ネセシテ）が生れるのだが）しかし現在彼らが置かれた佛蘭西の社會的、政治的現實を深く考慮するとき、彼らのとつた態度は充分に了解できるものであり、また充分の社會的意義を賦することが出來ると答へるものである。ことに彼らの位置と職責が思想的文學的領域に存することを併せ思へば。

二

佛智識階級聯盟とその「反ファッショ・監視委員會」の智的行動は、ファシスト脅威を警戒しつゝ、ファッシズムに絶好の機會を與へる思想的混沌を消散するために、またファッショが絶へず誘惑することに努めてゐる中産及小市民階級、農民、失業者、青年を啓蒙することに盡力を續けてゐる。その具體的な方法として、委員會は週刊報告書 bulletin hebdomadaire と數種の小冊子（ブロシュウル）を刊行してゐる。そしてもつとも科學的な見地から、フランスに於けるファッショ禍の現實、ファッシズムの社會的主張、ファッショ政治下にある諸國にあつての中産階級の現狀等についての研究報告が緻密になされ、一般勞働組合農民組合及び學生團體の利用に提供されてゐる。また一方、聯盟は、その加入者の多數がNRF、「歐洲（ユーロープ）」その他の大小雜誌の有力な編輯者または寄稿家である關係を利用して反ファッショ思想の普及に全線的な活動を示してゐる。昨年以來のN・R・F、「歐洲」、「モンド」のナンバアに眼を通した讀者は、それらの雜誌がとみに社會的、經濟的、政治的關心を增してきた編輯方針に氣付かれた筈である。そしてテイボオデやクレミューウのやうな聯盟にたいして同伴者的立場にある評論家が、或はドオデエ、モオラスの「アクション・フランセエズ」に對して、或はジュル・ロマン一派の「七月九日團（グループ・ド・ヌーフ・ジュイエ）」または所謂ネオ・ソオシヤリスト・グループ等のファッショ團體に對して勇敢になしてゐる論告を見た筈である。また

アランによつてなされた「火の十字團（クロワ・ド・フウ）」（大戰出征軍人團の右翼分子）に對する辛辣な批判をも……。のみならず、NRFが一昨年來、一般大衆を對象として發行してゐる週刊文藝、政治雜誌 Marianne はその通俗性を具へた巧な編輯振りによつて、反ファッショ、反ナショナリズムの氣運を勃興することに大きな努力を拂つてゐる。嘗て「モンド」の主筆であつたペエェルをその主幹とし、政治論說はL・O・フロッサァル（元S・F・I・Cの執行委員）に、文藝時評をフェルナンデスに、レコード批評をブロックに、映畫時評をA・サヴァルに擔當させ、その他ジイド、デュアメル、マルタン・ド・ガアル、ブロック、モオロワ、ジイロオドウ、ポール・モラン、マルロオ等各々現フランス文壇第一流作家のオピニョンを揭げ、エリメ、ボスト、ボオブ、ダビイ、シヤムソン、コレット、ジイオノ、エソア、ドリュ・ラ・ロッシエル、ギイルウ、モンテラン等々およそプロ派、民衆派、新地方主義派、行動派を通じてより拔きの代表作家のヌウヴェルを連載し、これに加ふるに、「マリアンヌ」特派員による大規模のレポルタージュが歐洲各國の社會情勢をあらゆる角度からスクープするためになされてゐる。就中重要なものとして、ケッセルによるナチス獨逸に於ける猶太人生活の現狀、アンドレ・モロワによる英國勞働階級の生活狀態、ドリュ・ラ・ロッシエルによる中歐及び伊太利の社會情勢についてのレポルタアジュを擧

げることが出來る。

わが國の文壇でも、最近漸くフランスに於てNRFが果しつゝある文學的乃至社會的な重要な役割が認識されてきたが、そのヴアルガリザションの機能を最も有效に働かせてゐる「マリアンヌ」の活動については未だに殆んど紹介されてゐない。私がこゝにその活動を特記するのは、それが佛智識階級聯盟の運動に少からぬ關聯をもち、潛在的に强力な支持となつてゐるからである。

三

フランスの急進智識階級聯盟の運動について述べた以上、私は他の一つの有力なインテリゲンチヤ團體の存在を云はねばならない。それはバルビュツス、ルイ・アラゴン、フイリツプ・スウポオ、エレンブルグ、アルトマン、ニザン、マルロオ等を中心とし、それにジイド、ロマン・ロオランの名を加へたA・E・A・R（Association des écrivains et artistes révolutionnaires）即ち「××的文學者、藝術家聯盟」である。これは前者に比して、より××的色彩が濃厚であり、且つより政治行動的傾向を强くもつものである。この聯盟の特色は、前者が思想の多樣性を抱含

して立つてゐるのに對して、鮮明なプロレタリア・……の作家的實踐を聲明してゐるところにあり（ジイドの場合は特別として）、また可成多數の美術家群を參加せしめてゐることである。わが國にも有名である立體派の彫刻家ザツキン、畫家フルナン・レヂエらもそのメンバーである。映畫人としては超現實派グループの、錚々たる新人が加つてゐる。また他の特色として、フエルナンデス一派の團體が殆んど純粹に佛蘭西人から成立つてゐるのに較べて、これは巴里在住のエトランゼ的要素を少なからず含んでゐることである。さうした意味で、よりインタナショナルであるとも云へる。A・E・A・Rはその機關紙として「ブルタン・ド・A・E・A・R」をもつてゐる外に、バルビュツスの主宰する週刊「モンド」を具へてゐる。

では、フエルナンデス一派とこの聯盟はどうした關係にあるかと云へば、私は何等躊躇することなくその二者も最も親密な友情的な相互扶助の交渉によつて結ばれてゐる、完全な理解の上に立つた共同戰線をはつてゐると斷言することが出來る。この點、理論の上で、より急進的であり、より公式的であることを競ふために、社會的現實の考慮から游離し、分裂と割立を好むこの國の左翼小兒病者のヒステリツク・セクタリズムは、それをよき他山の石として自らに教訓すべきところがあるのではなからうか？　それは兎も角、今日、NRF、「歐洲」、「モンド」の三大ジヤ

アナリズムが一つの鞏固なブロックを結成して、それらの共同の敵にあたり、また協力して共同の味方を廣く知識階級層一般に糾合しつゝあることは、最早何人も否定し得ない事實である。

昨年八月、モスコオに開かれた第一回ソヴエト作家大會に一方はフエルナンデス、ブロック、一方はマルロオ、アラゴン、エレンブルグを出席させてゐるが、フエルナンデスを除くほか他の出席者はソヴエト作家を前にして孰れも忌憚なく（ことにマルロオは）文學者としての彼らの立場と見解を披瀝してゐる。ロマン・ロオランやジイドは病氣のために入露することが出來なかつたが、ジイドは大會にメツセエジユを送つて、彼もまた彼の所謂コムニスト的個人主義 Individualisme Communiste の主張を力説してゐる。（文化集團、二月號參照）。

四

次に私はフランスに於けるファッショ智識階級聯盟について云はねばならない。この存在と活動を知ることは少からず重要である。何故ならばこの團體は量的に云つても、その積極的なヴアイタリテの上から云つても、前二者を凌駕するとも劣らないだけ社會的勢力をもちつゝあるからである。このファッショ聯盟とは、さき程指摘して置いたジユル・ロマンの「七月九日團」である

（ロマンは人も知るやうに、昔日のユナニミズムの創設者）。この團體もフエルナンデスのそれの如く、二月暴動から直接の刺戟をうけて生れたもので、議會政治否定のイデエに立つ右翼青年の改革運動である。これが他の智識階級運動と異る第一の理由は、×であるとか×であるとかは別としても、參加者の大部分が智識階級にあつて歴然たる特權階級をなしてゐるところにある。この運動はネオ・ソシアリスト、C・G・T（勞働總同盟）、急進黨及び出征軍人團の右翼を中心とする「火の十字團」などを横斷的に結びつけてゐるが、文壇・思想界の方面では「新秩序」「エスプリ」、「第三力（トロワシエム フオルス）」その他色々の青年雜誌、新聞を牽引することに成功し、昨年十月からはその週刊機關紙「今（マンテナン）」が發行されてゐる筈だ。現在のところ、前述の急進智識階級聯盟はA・F・A・Rと協力してこの擡頭勢力との抗爭に全力を盡してゐるやうである。なほ「七月九日團」その他の智識階級ファッショに就いて詳しく述べたいが、すでに與へられた紙面を超したから他の機會を期して、筆を擱く。

ソヴエト作家大會とジイド。マルロオ

昨年八月十七日から三十一日まで、モスコーに開かれた第一回全ソ作家大會にフランス側からマルロオ、フエルナンデス、ジヤン・リッシヤル・ブロック、アラゴン等が參加した。ジィド、ロマン・ロオラン、バルビュッスは病氣その他の事情に妨げられて出席することが出來なかつた。

ジィドが自らをコムニストとして聲明してから、NRF（新佛蘭西評論）の幹部同人の一部はそれぞれ急激な思想的展開を示してゐるが、この度同誌の最も活動的な編輯同人であるマルロオやフエルナンデスが大會に招聘され、また從來NRFと深い關係をもつてゐるブロック、アラゴン、それに在佛のソ作家として有名であるエレンブルグなどが揃つて出たことは、NRFの歴史から云つても、現代佛文學の社會的動向を覗ふ點から云つても、少からぬ意義をもつものである。

私がこゝに紹介するのは、大會でなされたマルロオの演說と大會に送られたジィドのメッセージ

である。これらの譯文は、昨三四年十一月NRFに特輯として掲載された「第一回ソ作家大會の報告書」から拔萃したので、そのテクストはJ・E・プッタァマンの編輯、飜譯によるものである。なほジィドのメッセージュ並びにマルロオの演說はすでに、わが國に於ても、二三の雜誌に飜譯されたが、それらをより的確なものとするため、また、より普遍するために更めて「時代」に紹介するわけである。マルロオに關するNRFに掲げられたこの報告書が、フランスの文壇、智識階級者に與へた衝動は、かの國のジヤアナリズム一般によつて知ることが出來るがその一例をあげると、最も官僚・ブルジョワ新聞として有名なル・タンですらその第一面に、NRF所載の大會報告書は萬人必讀のものである（勿論反動的、警告的な意味）でとまで云つてゐる。

NRF誌上報告書の序文（プッタァマン）

第一回ソヴェト大會は一九三四年八月の十七日から三十一日までモスコオに開かれた。ソヴェトの文學界では今から二年前に大きな變動があつた。

第一回の五ケ年計畫が行はれてゐた期間、文學運動の指導は全體的にプロレタリア作家同盟

（R・A・P・P）に所屬してゐた。しかるにプルジョワ精神に對する鬪爭機關として創設されたプロレタリア作家同盟は實際に於て極く粗朴な、そして指令mot d'ordreによつて出來上つた宣傳文學に停滯したために、永續性をもつた文學價値は生れなかつた。從つてソヴェトの讀者階級を構成する何百萬の勞働者及びコルホージヤンは軈て、あまりに初步的なそれらの文學作品から背をむけた。また一方他の文學グループは創造的努力の上で障害されてゐた。

さうした事情から、遂に黨の干涉となつて、R・A・P・Pは一九三二年四月に解散され、そしてその代りに全ソ作家同盟が傾向、黨派の區別なしに組織された。云はゞ、この度の大會はソヴェト文學の新しい狀態を紀念するものである。（譯者）

アンドレ・マルロオ

（すべての人間は彼自身の生活を思考すべく努めるものである。）

更めて私がこゝに云ふまでもなく、蘇聯邦は表現さるべきである。犧牲、ヒロイズム、執拗力よりなる、この尨大な總目錄がなさるべきは當然のことである。

しかし、諸君（カマラアド）、諸君は次のやうな事實に配慮しなければならない。それは、すでに北米合衆國

の範例がわれ〳〵に證左してゐるやうに、强力な文明を表現することは必然的に强力な文學をつくるものでないことである。從つてこの國にあつても、偉大なエポックを寫眞的に表出することによつてのみ偉大なる文學の創造を希ふことは出來ない。

藝術とは服從の謂ひではない。それは克服を意味する。その克服とは何ものを克服することであるか？

それは感情及びそれを表現する手段についての克服である。

而して、その克服は何ものの上になさるべきか？

克服はほとんど恒に、無意識に對してなされる。そして藝術家の內部に於ては論理の上になされる。

マルクシズムは社會的なものの意識である。文化は心理的なるものの意識である。

個人の名をもつて呼んだブルジョワジに對して、コムニズムは人間の名をもつて答えるであらう。

コムニズムが最も偉大なりし個人主義時代の指令に對して、對立させる指令は、マルクスにあ

つて「獨逸的イデオロギイ」の最初の頁から資本論の最後の草稿にまで一貫する指令は（より多くの意識 plus de conscience）につきる。

クラッシクなロシア小説家にあつての意識とは如何なるものであつたかを定義することは、一言にして云ひ盡せないことである。が、しかし、彼らに於ける人間の追求は、殆んど何時も人間意識に於ける矛盾、撞着、或は豫測し難い要素を表示することであつた。例へばトルストイの小説のある主人公が、凍えつくやうな寒い夜を歩きながら、寒さが、彼の愛を碎いたことを意識したり。またはラスコニコフがその殺人によつて、彼が殺人に期待した力を見出さないで、反つて孤獨を發見したとき、これら二人の小説家は何んとしたか？　彼等はそこで、論理的な事實 fait logique を經驗的な事實 fait empirique に置換する。さうして、心理に於ては眞實の論理は存在しないが故に（存在するものはたゞ模倣である）彼らは模倣はを發に置き換えたのである。

諸君が諸君のクラシックの作品を愛讀されるわけは、それは先づそれらが嘆賞に價する作品であるからだらうが、またそれらの作品が心理的生活の點からみて、ソヴイェトの小説よりも、より豐富でより矛盾的な觀念を與へるからであらう。また心理的に云つても、トルストイが吾々の

多數より、より現代的であるやうにあなた方が感ぜられるからでなからうか？

すべて藝術に於ける心理の否定は最も蟲劣な個人主義に導くものである。何故ならばすべての人間は、どうしやうと、彼自身の人生を思考すべく努めるものであるからだ、從つて心理の否定は具體的にかうしたことを意味する。それは己れの人生を最もよく思考したものは、他人に彼の經驗を傳へることをしないで、彼一人のうちにその經驗を保持することである。

嘗て王候も賤しい人夫共も、共にシエクスピイアの言葉を聞くことが出來たものである。今日、西歐人がチヤツプリンの姿を前にして、彼自身を苦々しく笑ふ機會にしか集合しない時。あるひはわれ〳〵西歐の代表的藝術家が、幽靈のために又未だ出生してない人間のために筆をとつてゐる時、諸君は、穀物粒のやうに相似し、しかも相異してゐる諸君は、この國に忽然と、シエクスピイアを誕生させる文化を表現した。唯こゝで私はロシアの作家が寫眞的寫實のために重壓されないことを希望するのである。その寫眞が如何に麗しいものであらうとも！　全世界は諸君から諸君の現實的なイメージを待つばかりでなく、なほ、諸君を凌駕するところのもののイメージを期待してゐるのである。そしてそれは、近い將來に於て諸君によつてのみ世界に與へられることであらう。

アンドレ・ジイドのメッセイジ

およそすべての國、すべての國民が遠かれ、辿りつかねばならないこの歴史の行路の上に、ソヴエトはその輝しい先驅者の歩みを搬ばせてゐる。が嘗つて夢みた、新しい世界、吾々が最早希望することを敢てしなかつた新しい世界の範例をソヴエトは今日吾々に與へてゐる。

エスプリの世界に於ても均しく、ソヴエトが自らを範として示すことは緊要である。ソヴエトは吾々に、コムニズムの理想はコムニズムの仇敵が好んで裁定するやうに（白蟻社會の理想）理想では決してないことを吾々に證據立てねばならない。ソヴエトは今日、文學及び藝術の領域に於てコムニスト的個人主義 individualisme communiste を設定すべく努力しなければならない。

在來人々は慣習的にこの二つの文字を對躅して使用してゐたが、私はその對立を誤謬なりとして、敢てそれらを結合する。恐らく過去のソヴエトにとつて強烈な斷定的時代が必要であつたのだろ。がしかし今日のソヴエトはすでにこの段階（エーダプ）を通過してゐる。スターリンの最近の論說なり演說はこの事實を最もよく證明するものである。

私は一九〇〇年の三月になした最初の講演會で、すでに次のやうなことを述べた。

私は、今日に至つてもその言葉を非常に正しい言葉だと考えつゞけてゐるが。

（すべて（偉大なる人間は眞の藝術家と云ふべきであつたが）たゞひたすらに、出來るだけ人間的にならうと念じてゐるものである。より適切に云へば、平凡たらんと devenir banal 望んでゐるものである。）私は斯う云つて、すぐ次のやうな言葉を付け加へた。

コムニズムは各個人の個性を考慮してのみその權威を保つことが出來る。個人が他のすべての個人に比べて似てゐるやうな社會は望ましきものではないし、また且つ不可能である。文學に於ては尙更に不可能である。すべて藝術家は各々必然的に個人主義者である。コムニストとしての彼の信念や黨に對する誠實が如何に大であらうとも、かくの如くあつてこそ藝術家は有益なる作品を作り社會に貢獻し得るのである。

が不思議なことには、かくの如くして偉人は最もパーソナルテイをもつことになり。私は集團に吸收されることを懼れる、無力者の危懼をば、無能、恥べきことと考えてゐる。コムニズムは强力な人物を必要とすると同樣にこれらの人物もコムニズムのうちに彼らの存在理由と彼らの德義を見出さなければならない。

行動主義は發展する

移り氣な文壇はこゝしばらくのうちに行動主義や能動精神の存在を忘れさるだらうといふやうなことを、あちこちの雜誌や新聞のゴシツプ欄でしば〳〵見うけるが、最近それに類した言説がとくに流行してゐるやうである。匿名でなされる卑俗な野次の域を越えないといへばそれまでゞあるが、あるひはそれらが既成文壇人一般の潜在意識や内心にあるものを代辯してゐるものとも見られないことはない。しかもそれら數多い『忘却説』がいまだかつて正々堂々と署名された責任のあるオピニオンの上で一定の理論的根據をもつたものとして現れないところに、與へられた問題についての彼らの認識不足、低い關心の程度、新しい文學精神に對する不信、不遜の態度がうかゞはれる。吾々は今まで繰返して、この國の文學を現在の沈滯凝固した狀態から救ひ出す最も有力な手段として能動精神、行動主義文學の適用を提唱してきたのであるが、それを一時的文

壇流行現象として無反省、無批判のうちに整理しようとする彼らの心理には、まさしく。すべての新しい精神的季節・エスプリ・理論を本能的に忌み嫌ふ保守主義者や傳統主義者の思想的老衰を證明するものがあると斷言して差支えない。今日吾々が提案してゐるものは、決して單なるいはゆる珍奇舶來の文學モードを移植することではない。それはこの國の思想的、文學的現實が本質的に革新され蘇生するために最も必要とするものを、現在他國の進歩的な思想や文學を生かしてゐる精神的要素に發見し、それに對する共感を吾々みづからの實驗のうちに具現しようと努めることにほかならない。が故に、それは多くの封建的性格によつて輸入品とか借りものの名によつて規定さるべき性質のものではなく、吾々が普遍的な人間として生存し成長する上に、吾々のインテリゼンスや良心のための必然的需要として考へられるべきものである。需要を感ずる精神を否定することは、宛も影響を拒絶することゝ同じく、全體との關聯をしりぞけることであり、從つて眞の個性とその發展を阻止するものである。

勿論吾々の思想が必然に需要し、また思想の普遍法則によつて供給されたものが、今後この國の思想や文學が置かれてゐる客觀的現實や、また吾々自身を條件してゐる素質や性格のうちにあつて如何なる成長の姿態をとるか、それは全然別個の問題である。即ちその發生的段階と發展的

過程の間に自ら、豫測し難いひらきなり飛躍が生ずるであらうことは考へられるし、またかくあることとこそ自然であり、望ましいことなのだ。何故ならば、吾々も吾々の原始的思想過程に何時までもしゆん巡、固執することに甘んずるやうな非個性、非創造的性格でないことを充分に信念してゐるからである。

この國の能動精神や行動主義の展開はいよ〳〵これからである。それはあらゆる外部からの嘲・嘲笑・無關心に敢然と拮抗してゆくであらうし、また内部的にいつて吾々の弱點、模索、矛盾、實現の苦惱にも打克つてゆくであらう。そしてこの選ばれた多難なペリグリナージュの途にあつての征服の過程に吾々の人間的價値を試練する機會があり、その試練を享受するところにこそ能動精神、行動主義の第一義があるのだ。

ちやうど、私がこの小文を書きそめたとき、『文藝』六月號に矢崎彈君の『行動主義は矛盾がお好き』が現れた次にその檢討を對象とする。

矢崎彈氏の『行動主義は矛盾が御好き!!』といふタイトルからしてどこか大森義太郎流のイロ

ニズムの臭ひがするが、この評論のロジツクにも著しく二者を接近させるものがある。たゞ大森と矢崎を隔つものは、前者にあつて後者に少い、鋭敏な客體把握の力量の差の外に、兩者の批判的觀點の差である。大森には大森らしいマルクシズム・アカデミツクの觀點がはつきりして存在してゐるのに比較して、矢崎の所論には明瞭な批判の規準が缺けてゐることである。少くともこの文章では數多くの批判的な言辭が、エクサントリツクな激情の波にのつて配列されてゐるわりに、批判が指し示してゐるべき筈の世界の規定がない。

矢崎氏は日本の行動主義は、フランスからの（輸入のレツテルを擔いだ）ものに過ぎない、なぜなら彼我の行動主義は全然相反した文學的現實に發生した、が故にかの行動主義は本物であるが、わが國のそれはまがひ物であり、（行動主義といふ輸入の衣裳をつけたいばかりに手足を不自然に手術して松葉杖にすがつてゐる）ものであるといふ。彼我の文學的現實といふ文字を彼我の社會的現實といふ文字に置換へると、あとは大森式ロジツクに瓜二つである。いましばらく、彼我の文學的現實乃至社會的現實相異の問題についての考察を留保することにして置いて、私は先づ開き直つて、日本の行動主義の矛盾と混亂を指摘する矢崎氏が、ではフランスの行動主義に對して、文學者としての彼自身の批判的立場をどう位置づけるか、換言すればそれを肯定するか、

否定するか、それともあくまで超在的批判の立場にたつのか、それを聞きたゞしたいのである。氏は如何にも、充分の理解と共感をもつ者のやうに、彼の國の行動主義の發生した文學的環境やその歴史的條件についていさゝかの不安も見せず得々と叙述してゆくことにおいて（それも畢竟するに日本の行動主義を反駁する意圖に起因してゐるのだが）大森と同じポーズと技巧を用ひてゐる、しかし結論的にはマルクシズムの價値を行動的ヒュマニズムの上に置くことに何ら躊躇しない大森に對照して、矢崎はいはゆる本物のフランス行動主義を何んと裁定してゐるのか全く不明である、また、能動精神の擡頭期にあつて、多少とも積極的にその運動を支持した彼矢崎と行動主義との内部的關係はなほ更にあいまいである。こゝで忌憚なくいへば、フランスの行動主義とその文學について、矢崎氏がどの程度に準備された具體的な認識をもつてゐるかは、私にとつて一つの大きな疑問である。最近行動主義批判のために書かれた氏の評論を、既往の氏の評論とコントラストしてみると、ことに近代フランス文學に關する範圍においてこの疑惑はいつそう強く深められて感じられる。私はすでに私の『大森氏に對する公開狀』の中でこれとほとんど同樣の質疑を大森氏に宛てゝ置いたが、こゝでも繰返して矢崎氏に對して、行動主義を批判するに先だつて氏が先づ何よりも一應その思想史についてもまた文學作品についても充分の實驗的知識を用意

されて置くことが、批判者にとつても被批判者にとつても肝要であり且つ有效であることをいつておきたい。およそ燥急素朴な知識ほど批判家のオーソリティと批評價値を低減するものはない。

批評家としての矢崎氏の强味はこの國の批評界の一般的傾向である主觀主義、抽象主義を排して、批評と文學的現實を密接な關聯にもつてきたところにある。さうした意味で僕は、在來の氏の評論を興味深く讀んで來た一人だ。ところが最近氏の書くものには、その良質的な面がかなり稀薄になり、それに代つて客體把握における焦燥さと主觀的感情の過剩が著しく目だつて來た。こんどの行動主義批判などはその一例であらう。かうした傾向はさつきちよつと指摘しておいたやうに、現象批評がたゞの現象批評に終つてゐて、そこに一貫した批評の立場と規準を缺いてゐることに原因してゐると思ふ。

それはそれとして、これから氏の行動主義反駁論の檢討にかゝることにするが、僕は出來るだけそこから反駁のための反駁といつたところや、感情の論理とその修辭（レトリック）に支配された部分を除外して、批判としての内容と條理を具へた面をのみ順序的に取上げて行きたい。

矢崎氏は行動主義派といふ單語を隨所に使つてゐるが、それが行動主義の意識に出發した文學者を指すものであるか、あるひは一連の能動精神提唱者、贊同者を目指していつたものか、それ

とも單に世間的に雜誌『行動』の執筆者グループと想像されてゐる人々を指したものか、僕には全然見當がつかないのである。それにまづ第一、現在能動精神派と呼ばれてもいゝ集團はあるにせよ（それもまだ日本浪漫動のやうな結成をもつてゐないが、）行動主義派なるものは存在してゐないのである。（たとひそれがこの國の文學的現實に作用し影響するところがあつても）。矢崎氏は（ひと〳〵の多くは能動精神がいかにして行動主義にむすびついたかにうとい。行動派の人々も不問に附してゐる）といつて、暗に私の（不問の態度）をきめつけてゐるが、しかし、かくいふために、氏は一應能動精神と行動主義の本來的區別とその相關點を瞭に意識しておくべきであつた。私は今まで、しば〳〵この問題に觸れておいた筈であるのに、文學の素人ならいざ知らず、矢崎彈ともある批評家が、その認識を缺いてゐることは不審である。

能動精神とは文字の示すやうに一つのアクチイブな精神狀態である。フランス知識階級の活動に刺戟されて勃興したこの國の一部知識人の社會的良心の覺醒である。そして、それは舟橋氏の意志的リベラリズム、春山氏の新知識階級論として、また文學における積極性、社會性の主張となつて現れた。換言すれば一種の發生過程にある社會的ヒユマニズムの運動であり、本質的に文學以前のものとして重要性をもつものなのである。例へば新文學の出生を促すための新しい精神と

かモラルの問題として。

ところが、行動主義は判然とした理論體系をもつた一つの近代思想であつて、それが文學的領域に適用される場合行的主義文學となつて具現されるものである。

紙面に制限があるからくはしくいへないが、概略的にいつてそれらの區別は右の說明によつて自ら瞭になるだらう。と同時に能動精神と行動主義の二者がともにヒユマニズムの意識に根ざすところに、直接の關聯が成立するといひ得ることも容易に理解されるであらう。

吾々の提唱に對する矢崎氏の重要な非難の一は、次に引出する言葉によつていひ現されてゐる。

『小松清氏を煩すまでもなく、フランスの行動的ヒユマニズムは不安文學の次に輸入され、この國の人々がその理論を都合よく結びつけようとしたが、彼我の文學的現實は全然相異してゐることに氣づかなかつた。彼らは、彼我の社會的現實の相異を云々するのは好きだが文學的現實の相異には鈍感だ。彼らの理論の破綻はこゝに芽生えた』

が、これは少し素朴すぎる考へ方である。少くとも、思想や文學的所產を現象的に考察するものにとつては、なぜならばある一定の思想や文學は必ずしも同一の社會的乃至文學的現實に發生

するものと限られてゐないからである。Aの文學的現實に生れたものが、Bの文學的現實から生れ且生長し得ないといふことはない。いまさらルネツサンスなどの古い昔の例をひくまでもないが、近代日本の文學史を見ても、自然主義からプロレタリア文學期に至るまでの文學的現實と歐洲のそれとは必ずしも同一のものでなかつたばかりでなく、時としてはその間に大きな相差をもつた歴史的條件の下にあつたことを吾々は知つてゐる。美術の領域でも、この國に相次で生起した未來派、フオウビズム、立體派、超現實派等に關聯して同じことがいへる。したがつて行動主義が超現實主義に繼いで起きるものであり、また起きねばならぬといふ必然論は、その逆に、超現實派文學の後にはきつと行動主義が發生するといふ必然論同樣にあまりに單純な辨證法である。何故なら若しさうであれば、我々は歴史の條件に身を委ねることによつて、フランス人が知つたやうな（戰後の不安）や（自我の分裂）の秋をまち、そしてその後に行動主義の來るのを俟たねばならないことになる。しかし歴史と文化について考へる者の誰もが多少とも意識してゐるやうに、歴史の條件と思想の條件は多くの相似性（シミラリテ）をもつであつても、決して同一性のものではない。

すなはち吾々の思想の世界では、みづからの直接經驗の圏外においても、一度意識され思想さ

れたものは、立派に思想的現實となり、思想を條件するものとなりうるのである。この事象が今日のやうにすべて人間生活が世界的單位にたつてゐる時代にあつては、ますますその重大性を增すことは自然である。如斯觀點よりして、私は文學的現實を矢崎氏と異なる規定と國際的な流動性の上におくものである。また一方、氏の强調する彼我の文學的現實の相異といふ點についても、私の見解をいへばその相異はむしろ文學史的側面にあつて、文學が內容するものにあつては、客觀的にいつてこの國の文學ほど時代的不安や歴史との分離や自我分裂を無意識のうちに潜在させた文學は少いと思つてゐる。それはかつてフランスの戰後文學や殊に超現實のやうな不安意識を明瞭にもたないだけに、それだけなほ更特殊な不安の空氣を多くたゞよはせてゐる。歴史的にも人生的にも理想主義の足場を失ひ、また一方主知主義か主情主義のヂレンマに陷つたわが文學が——社會的現實の不安を離れた境地においても——それ自體の文學的現實のうちに充分な不安の要素をもつことは肯定できない。

以上いつたやうな根據から私は、社會的及び文學的現實の不安への對立意識として、現世代における個人と歴史の調和、個人に於ける全體性の追求とその具現のイデエに出發するこの國の行動主義の存在理由とその將來性を確認するものである。勿論吾々と雖、吾々の生活現實が大きな不安

の季節にあることを知つてゐる。然し、と同時にその季節が吾々の永住所であり得ぬこと、亦それを克服することにこそ吾々の意志的生存の意義があることを肯定するものである。矢崎氏は吾々のこの態度を稱して、文學逃避あるひは反動的逆上といふ。私の甚だ理解に苦しむところである。

最後に、行動主義における行動の意義をいかに規定するかの問題がある。矢崎氏はいふ。『かれらの言をたゞに文筆の世界に自己を封鎖する態度に信念の限界がある』あるひは『政治か文學かの見境のつかない境地、ひたぶるに社會の進歩に全身をのたうたす人間が、おれは小說を書く事で滿足しようなどとはいへない筈だ』と。吾々は既にこれと同種同質の言葉がプロレタリヤ文學時代に無數に繰返され、そして斯如テーゼがつひにプロ文學の貧困と敗退をもたらせたことを熟知してゐる。いま改めて氏からこの素朴な『政治か文學か』論の說法に預かることはむしろ意外ですらある。文學者に對して（文學よりの逃避）をしば〳〵責める氏が、いまその途に吾々を刺戟誘導しようとするのは不可思議なロジツクである。こゝにも氏の論理の燥急性の一つが現れてゐる。なぜなら氏は文學者の社會的機能を文學から離別して街頭におかうとする。換言すれば氏は文學者における社會的行動は文學的手段のうちに、その最も本質的な從つて有力な表現を見

出すといふ、もつとも單純な眞理を忘れてゐるからである。それをいふために改めてこゝにジイド、ロマン・ロオランやフエルナンデス、マルロオの社會的行動の性格を說明するまでもない。私のいひ分に對して、矢崎氏がそれを『文藝』誌上でいつてゐるやうに、デマゴークや臆病者の自己辯護としてたゝきつけるかも知れない。しかし齡六十あまりになるまでほとんど演壇を知らなかつたジイドや、半生をスイスの閑村におくつてゐるロオランの生活が、なぜ今日かくも全世界の知識階級人の社會的良心を敢然と代表してゐるかを、矢崎氏は考へねばならない。臆病を侮蔑することに於いては吾々も矢崎氏に劣らない積りである。しかしまた吾々は吾々の唯一の人生を低俗なヒロイズムの標本にしたくないのである。

行動主義とは巷間に傳へられてゐるやうな、反理智的な衝動主義、野性主義の讃歌（アポロジイ）でもなく、想思卽實踐といつた風の勸工場（バザー）向の商品でもないのである。若し左樣な性質のものであれば、行動主義は旣に過去に於いて無數のプロ文學者によつて實踐されたものであるし、あるひはまたその反對に現在一部のマルクシストによつて指摘され警戒されてゐるやうにファシズムへの前兆であるだらう。こゝに繰返していふまでもなく行動主義は其の理想とする社會變革をヒユマニズムの信念の上におくものである。が故に其のすべての行爲は人性的經驗を經たもの、そして直接人間

性に訴へる手段のものでなくてはならない。行動主義文學は實にこのモラルの意識と意圖に發足したものである。これを結論していへば吾々の社會行動の本質は吾々の個的良心と意識を可能である限りその純粹性に保持するもの、卽ち眞に吾々の文學行動に於いて規定されるものである。

さて、この邊で、吾々に關する矢崎氏の駁論に對する私の答辯を終らねばならぬが、畢竟私の反駁は、氏の批判が單に批判のための批判の域を越えてゐないこと、それが吾々の文學運動を發展させるために何等暗示的な働きとなつて現れてゐないことを瞭にしたところにある。眞の批判とは教訓である。あらさがしの忠告でもなければ、ましてや矢崎氏流に徒に揶揄のレトリツクを弄することの謂ではない筈である。

能動精神に對する矢崎氏の豫言が奈邊をさしてゐるか、それは別問題として、いま能動精神は其の第二次的な發展段階に當面してゐる。其の前進活動は既成文學の破壞と新文學の建設を目標としてはげしく繼續されつゝある。そしてそれがための新しいエスプリとして、また方法論の一つとして行動主義文學がいよ〳〵其の存在理由を確實にしつゝある。吾々の責任はそれをこの國の文學的現實に卽しつゝ、實現させて行かねばならぬところにある。

行動主義文學論

定價 五十錢
送料 十錢

著者 小松清
發行者 田邊茂一
發行所 株式會社 紀伊國屋出版部
東京市淀橋區角筈一ノ八二六
振替東京 七一四二九番
電話四谷(35)〇一〇七
印刷者 石崎宋一
東京市淀橋區下落合一ノ一八
印刷所 祖谷印刷所
電話大塚(86)四一七五
昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十五日發行

KINOKUNIYA

紀伊國屋パンフレット第一輯

能動精神パンフレット

田邊茂一編

—執筆者—

青野季吉　十返一
阿部知二　藤原定
小松清　森山啓
窪川鶴次郎　福田清人
新居格　矢崎彈
阪本越郎　春山行夫
豐田三郎　舟橋聖一
田村泰次郎

一九三四年度後期より擡頭し、この國の文學界を瞬くうちに席捲した文學思潮は實にこの能動精神であつた。不安・懷疑・因循の牢獄を脱し、文學を狹隘なる私小説的洞窟から太陽のある世界に引き出さんとした最も力強い叫びは能動精神・行動主義の主張であつた。

四六版　二百四拾頁
定價　五拾錢（送八錢）

紀伊國屋パンフレット第三輯

純文學のために

田邊茂一編

—執筆者—

横光利一　春山行夫
廣津和郎　小松清
尾崎士郎　板垣直子
舟橋聖一　小林秀雄
川端康成　島木健作
阿部知二　窪川稲子
中河與一　片岡鐵兵
椙山勤　岡田三郎

純文學は興隆せねばならぬか。
この國の文學を世界的水準から引きづり落し國民の文學的教養を阻害し低劣ならしむるためにのみその存在理由を持つかに見ゆる所謂通俗大衆文學を打破殲滅し、純文學のために鬪ふこの華々しき戰列を見よ！

四六版　二百二拾頁
定價　五拾錢（送八錢）

紀伊國屋パンフレット第二輯

ダイヴィング

舟橋聖一著

—内容—

ダイヴィング
青年たちの手帖
眠る女
敗戰圖
舊い仲間

一九三四年度の全日本文壇を通じ最も重要なる多くの問題を提起し、ために幾多の反響を惹起したのは、實にこの「ダイヴィング」一篇である。三五年度に入つて、此の作者は更にその歩幅を擴大した。能動精神・行動主義文學を代表する問題の小説集である。

四六版　二百四拾頁
定價　五拾錢（送八錢）

紀伊國屋パンフレット第四輯

弔花

豐田三郎著

—内容—

弔機械
細い女
未就職者の手記
氷上靴
リラの手紙
花記

最近の小説はその心理の取扱に於いて、行動の躍動的把握に於いて、描寫の近代的リズムに於いて、構成の逞しさに於いて一變するに至つた。能動精神・行動主義の若き一メンバーとして力强く擡頭せるこの新人に於いて、かゝる文學的革命新技術が最も優秀に表現された！　かくて新文學は出發する！

四六版　二百三拾頁
定價　五拾錢（送八錢）

666
307

織田正信譯
書簡集 **D・H・ロレンスの手紙**
新菊判
二五〇頁
¥ 1.80
送料 0.10

廿世紀世界文學の最大なる奇蹟は焰の中に輝く不死鳥D・Hロレンスである。理智の人ハクスレは彼の情熱の前に脫帽してこの書簡集を編纂した。ロレンスの藝術の秘奥の核心を摑むにはこの書を措いて他にない。

舟橋聖一著
長篇小說 **白い蛇赤い蛇**
入函製特製四六判
四一七頁
¥ 1.50
送料 0.14

昨日の作家の描く疲勞の文學は本書の潑剌たる意圖と新鮮な感情の表現に依り全くその存在性を失つた。氣鋭の作家が放埒な色繪具で近代女人群像を描いて、その情慾の芽々たる匂、切々たる眞實への迫進、新興文壇の逸品である。

阿部知二著
評論集 **文學の考察**
入函判菊
二六〇頁
¥ 1.80
送料 0.10

犀利緻密なる批判の眼をもつて、文學の諸問題を根本的に究明し、特に心理、リアリテ、秩序、時間の問題を分析批判し外國作家をも檢討し、新しき文學の方向に正しい指標を與へるものとして注目の本書である。（日本圖書館協會推薦書）

矢崎彈著
評論集 **新文學の環境**
製並四六判
四七九頁
¥ 1.30
送料 0.12

著者は日本的思考の弱點を衝き、觀念の是正を說き、既成作家崇拜の隋性に唾し生れ出づる新文學の環境をといてその制作精神を鼓吹する。既成の謬見に閉された新文學の萌芽は本書に依つて生長の糧を得つゝある。

666
307

紀伊國屋パンフレット第五輯

KINO KUNIYA

紀伊國屋出版部

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black